

# Essay

Sapiarc.com

2015年4月5日(2015-3)

## 四谷あたりの思い出

今日、四谷のイグナチオ教会に行った。その目的は、教会の地下にあるクリプト(crypt)にあるH.I.先生の「お墓」に詣でることだった。先生は約1年前に亡くなられた。ある個人的なこだわりがあって、私はお別れの会に出なかつたので、その代わりに、今日お墓参りをした。今日は、たまたまキリスト教の復活祭の日だったので、教会は賑わっていたが、クリプトは静かだった。ひとりで行ったわけではなく、連れが居たが、それが誰かをここに書くことは必要ないだろう。とにかく今日は行って良かった。すべきことなのにし残していたことをようやくしたという気持ちになれた。

考えてみると、私は過去20年間ほど四谷に行っていなかった。だから、その変わりようには驚いた。とくにイグナチオ教会がまったく新しい建物になっていることを今日初めて知った。

四谷あたりは、私が日比谷高校の生徒だった60数年前には通学路の一部だったのだ。登校するときは、四谷駅から赤坂離宮に沿っている紀尾井坂を下って、赤坂見附に出て、生徒たちが「遅刻坂」と呼んでいた急坂を登って、高校に着くのが普通だった。当時は、紀尾井坂のあたりは人通りの少ないところだった。歩く時間を計ったことはなかったが、多分少なくとも15分はかかっていただろう。同じコースを都電も走っていたが滅多に乗らなかった。下校するときには、逆のコースを辿ることもあったが、弁慶橋を渡って、清水谷公園の前を過ぎ、坂を登って、上智大学の横の道に出ることもよくあつ

た。当時はホテルニューオータニが建てられるよりもかなり前のことだ。

今では外観はまったく変わってしまっているが、この辺りには10歳代後半の若い私の思い出が詰まっているところだ。このような通学の仕方をしていた同級生は僅かだけだったが、そのうちのひとりが私と同じ思い出を今でも持っているかどうか、私は知りたいと思うことがある。しかし、それを尋ねることは難しい。何のこだわりもなく昔のことを語り合える人たちは幸せだ。私たちの過去は私たちだけのものだ。そのうちに、私もその人もこの世を去るだろう。そうすれば何があったのか知る人はいなくなる。それは当たり前のことだ。元に戻ると、H.I.先生のことを私がどう思っているか、私が人に言うことは簡単ではない。人の世とはそういうものなのだと、つくづく思うことが近ごろ多くなっている。(おわり)